



新齋夜語

青

2701
5-1
~ 13



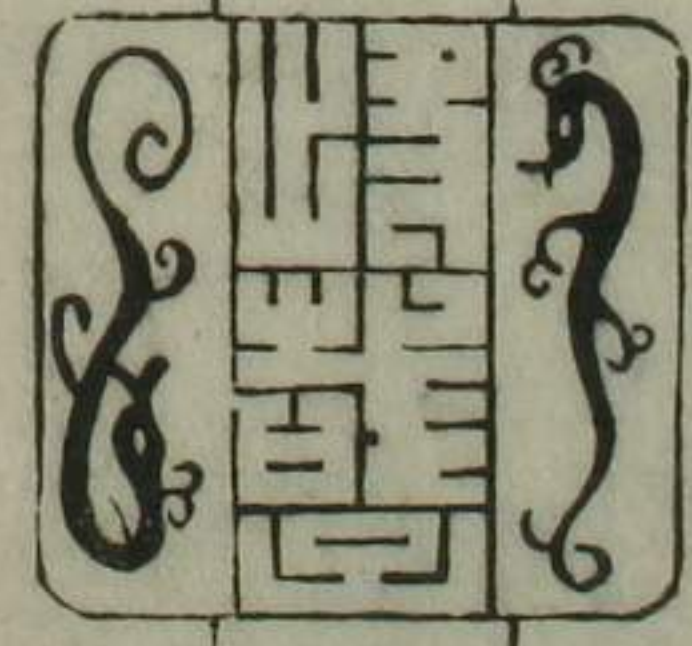
以雅心變美新奇而治之其體
怪美而正其夫不語也教或以為
動激之一助邪然其國字之去
久之習又涉之氣呼而與海之已
其子笑而投界祝融也且世憐之
勿使他人務目也余讀一過輒名曰
夫性宗廟也室飾以金玉耳案
憐者想其鍊心能能痛豹增觀

其富惡然後福祠亦當其來名
政亦而為存其年其此編不之然
乎字質於其毒托其平低邪又得
而南其之流也為教一讀之其拍然
折噴然笑不知其淺明常之則
而不謂其激也一助其何怪而
云其有主人曰善於是乎後探名
曰新高而所清每序之其心

多故産く恒ふふ得形る好廻去火
詳云尔

明和字水仲秋

君山朱正為撰



新齋夜語

東都 梅隴館主人述

條名

一之卷

一 北野の社僧昭君此詩成難也
渡邊滿綱古今乃射法と辯也

二之卷

二 小西氏の處女天遇れ嫁をなす
賣茶翁教奇の正道を語ふ

三之卷

三 岐阜の老尼出離の縁を明す

六 戸田茂睡つまゝ草を傍む

四之卷

七 室に妓女松風が任侠幸と迎ふ

其二

五之卷

八 嵯峨乃隠士三光院殿を結ぶ

九 鍛冶國助家業を託して士を諷む

已上

新齋夜語卷之一

一 北野北社僧昭君乃詩を難む

其のうゝ播陽に在り大石良雄の於に登り山科の辺に蟄居

そのゆらぎをたれそその並にされともて後秋の夜は月
さよと詠せしむ日較つて冬も中半はは次男大之郎ハ八歳許
なるを付いて活中北社僧と見えたり。今宵ハ家業をたれそ
す小知人侍をさへ宿しとてさしおひ人むふ用し申の別る
比小堂より神本に額実佛繪馬殿をたてて依り木提系

が川波一 時致義秀が草摺引ると指ごして。大之房よ又せし
免いよ一の兵いかくそ勇て。世よ名を去らうかどと人
穿んたる。點頭くく人乃強馬を指ごし。あ乃虎の女は器
琶を抱きて馬よ乗中泣きわらひ。いふる人ごと同くは先
いそ後く。れ王昭君とつひ美人なりといふ。それい何
也かく馬よの足。泣きながらいつく人新と同より。これ昔漢
北御門へ單子といふ國の王使を遣つて。御門より三千れ后成
具しあやう。その内を一人たまらう。ばより。これ後結ひつりて
長く貞哉なり。命よ背くまぐとカ。彼玉の兵強さ
不たれば。それい。仇をうば。天下れ乱とあらぶ。さま。此く夫

と事極りぬ。ね三千れ后乃ら。泣とく。御門も見ぞ人あつて。
いづま紙いはれと撰ひが。これい。畫工よ作く。名その款う
くらと筆写させ中よ。執く。醜がんを彼國へ遣い。いんと
れ詔さりたれば。是をひく。後宮の后くら。あむくと。彼画工
と贈物。と。賄賂。ら。中よ。昭君といふ。容貌衆よ。勝を
くらたれ。虎を画く。豹よ。類。ら。等。よ。も。あ。ら。う。さ。ら。う
ぬ。い。と。姿。と。憑。く。賄賂。を。お。う。ら。う。さ。ら。う。よ。人。の。む。は。む。ら
しも。今。も。う。ら。う。ら。う。び。黄金。ま。う。ら。う。ら。う。を。ま。り。換。う。ら。う。ぬ。お。ひ。よ
て。昭君。が。款。を。せ。を。いと。醜。く。書。写。せ。り。御門。を。強。と。も。と
御後。と。ら。う。福。と。ら。う。も。及。り。守。昭君。よ。極。り。ぬ。う。ら。う。御門

新書

七服君をさしきく之ありよ。四色勝まてらり。うべ取替ん
 とせや。うど。信を外必よ。う。さりん。と。紙性。こ。た。ま。い
 終る。服君を彼必よ。つ。ふ。され。たる。と。なり。昭君。ひ。り。と。下。を
 琵琶。れ。妙。子。なる。う。う。べ。都。の。裏。に。抱。き。初。馬。上。り。も。調
 べ。り。其。樂。成。王。昭。君。と。号。て。今。皆。人。ま。で。涙。を。さ。ぐ。れ。と
 と。く。さ。ま。り。され。む。詩。も。昭。君。若。贈。黄。金。賂。定。是。終。身
 奉。君。王。と。作。ま。り。と。終。る。時。後。の。方。は。嗚。び。ら。る。色。し。て
 に。掃。と。詩。の。誦。し。や。う。う。き。と。い。て。る。哉。い。ら。る。人。う。と
 賜。ま。て。考。る。宮。法。師。の。所。灯。の。油。を。さ。り。て。本。社。の。う。へ
 初。よ。そ。あ。り。ら。る。い。と。い。ふ。う。く。昔。或。人。は。所。社。へ。ま。う。て。

東行南行雲渺々。二月三日日遲々。たりと。誦し。う。べ。内
 陣より。妙なる。所。考。を。お。し。く。さ。ぬ。よ。ゆ。さ。う。う。さ。ぬ。り
 ゆ。こ。雲。を。ら。く。さ。ら。く。と。わ。よ。い。ら。う。く。と。そ。そ。吟。ま
 つ。こ。う。と。宣。ひ。し。と。そ。そ。あ。や。その。こ。う。い。し。神。の。告。あ。る
 よ。や。と。い。ふ。か。れ。ば。徐。に。初。き。本。社。に。参。り。宮。守。の。僧。乃。宿
 壺。不。成。さ。り。祝。け。け。夕。葉。を。く。集。積。も。こ。え。外。の。宮。司。あ。る。も
 海。の。う。か。の。老。法。師。の。相。火。桶。ま。さ。ら。ぬ。わ。ら。に。幸。と。立
 寄。る。あ。る。童。の。い。と。よ。芳。き。結。る。勢。い。と。そ。そ。と。い。ふ。は。
 易。き。事。と。そ。茶。を。と。あ。ら。う。く。も。焼。く。は。所。社。の。号
 と。あ。り。さ。ぬ。る。と。い。て。お。今。昭。君。の。迹。を。吟。せ。と。法。師。の



かく末代まくだいは英名ひがひをこれとつまじの志こころをふるまへて。昭君せうきんの潔白けつぱくと賛さんしあつるる。是下これしたれは。一ひとかやうとて。昭君せうきんが清澄せいじやうを過あやさるやうと心こころぬめやうと信まをせば不圖ふと難たがひしは。今いまの代よは侍しやくる人ひとをえ侍しやくるよ。その心こころの過あやさるあつても。少すくなり。比ひふ才さい是れ及およぶる事こといさぐで。天下てんかの大官だいくわんは昇のぼらん事を好あむ。彼方かた此方こなたは画工えくこうの如ごとく。彩色さいしき公卿こうけいは門かどは侍しやく候こう。形勢けいせいの途とは奔走ほんそうして。僥倖やうじやうは勢せいひを以もて。武夫ぶふう前まへは呵あし。從志じゆし途とは塞さきがる紙かみり。かゝるゝめさ。ととくも道みちのむらり。これを晏子えんしが師し者しやれ顔かほつ。され涉せつ猿えんく。又またおとり。これ架か紂じゆうの天下てんかよ王わうとれ

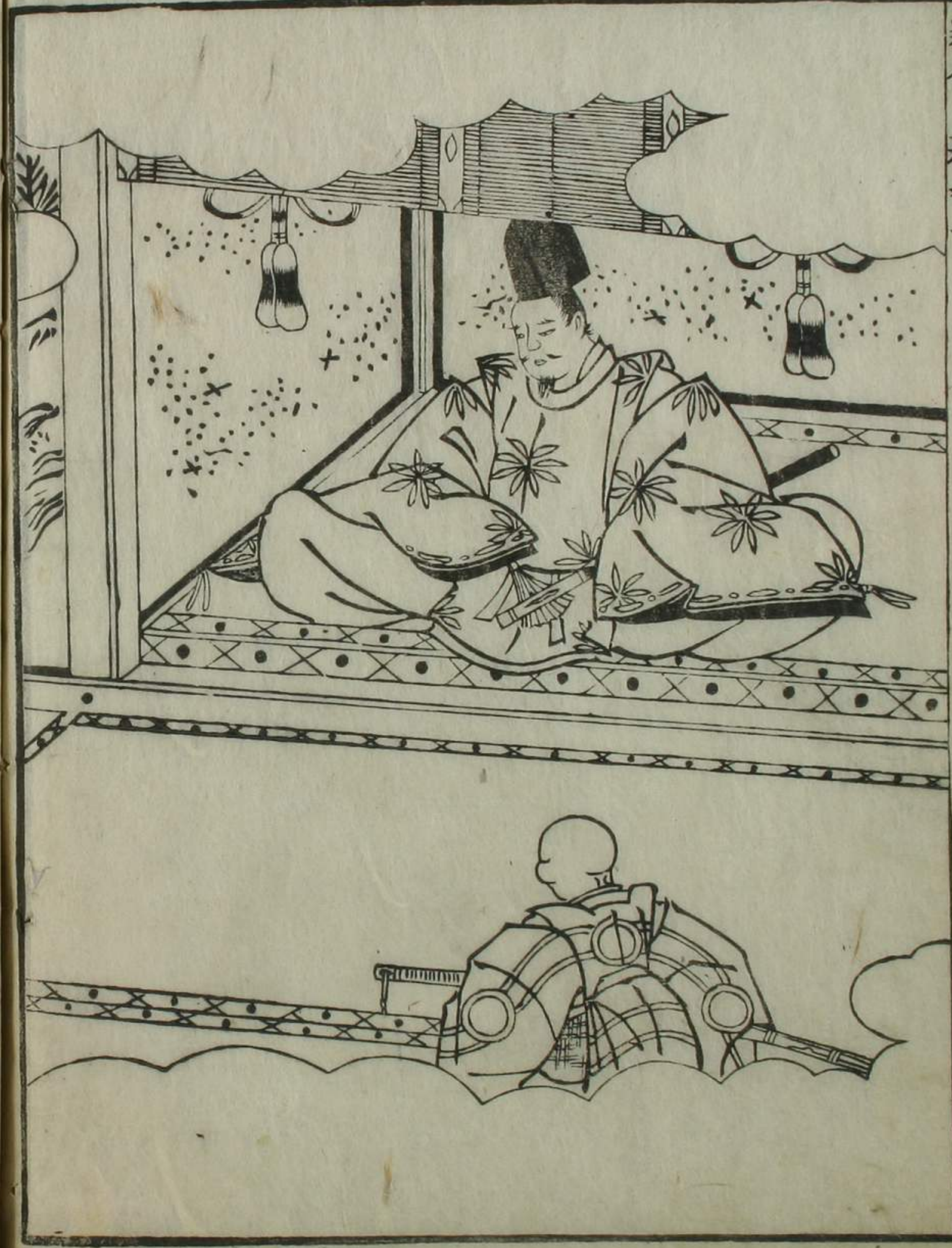
とも人ひとを惡にくむ。夷い存ぞんの首陽しゆやうは餓うれ。とも人ひとは。好あむ。清盛せいせいの英華えいげあ。んより。正成せいせいが。餘命よめいあら。そ。羨うらやし。僧そうの利りの。め。法ほふを説とを賣う僧そうとい。や。一ひと之これ。士しの利りの。め。ふ。侍しやくるを。高たかなる。と。い。や。織オリる。名利めいりあら。ま。ぐ。ら。と。れ。て。そ。道みちよ。近ちかづく。とも。い。や。べ。ん。至いたる。人ひとの。名なも。か。く。徳とくも。ま。一ひと。從じゆ可か不ふ可か。一ひと條じようの。道みちを。以もて。何なにぞ。と。れ。を。論ろんむ。ら。の。号ごう。或ある侍しやくん。や。と。い。ひ。一ひとよ。良りやう雄ゆうの。内うちよ。れ。り。い。あ。つ。も。み。あ。れ。い。その。心こころよ。破やぶら。る。と。う。是これへ。く。政せい神しんよ。せ。い。あ。つ。も。感かんし。わ。り。一ひとか。か。て。夕せき梵ぼん。近ちかく。第だいよ。勢せいを。そ。て。眼がん乞ぎ。一ひと。あ。ぬ。あ。ま。る。と。ま。つ。う。く。た。う。と。こ。よ。守まもり。て。尋たづね

侍らりしつゝ。その儀のつづら初らんをうへとく

二 渡辺満綱古今に射法を辯む

渡邊源次満綱ハ刑部丞忠房が子なりしが。觀應三年。父忠房武藏野の合戦に討死の由いふに。幼弱なりたるに隨つて。武列箕田に在りしが。生得弓矢れ道よからく。文才も秀る。經書に涉り。頗る兩道の先達と名を風とせり。志少りしをうへ。は以て將軍義満公に治せしめて。天下をほとんど干戈を忘る。文花はくは盛るるをばはいて。公は鹿苑寺を建立し。金閣を營む。ゆふといへども。控兵法を

好まひ。弓箭れ故實甲冑れ製法など。道くの者ども。好む。右か。御紀明流うへ。箕田の源次が。弓道に委こし。台聴に遣し。これに急ぎ。石室せし。室町の御所。急上し。台教を授けり。初く弓矢の故實ハ草席丸物牛追物れ式ハ的々九れ手換乃例鳴弦。碁目れ大事軍射よ。おわく。矢入矢合れ法。屏下櫓。乃附の傳を初とて。あつて。演説。乃及。平服。乃附。松丸緒れ。苗板。まとい。右大將家の時。に傳來。絶秘。此勝事。ある。紙も。源次。あり。これ底を究め。奥を尋り。傳述。その趣。を。守りて。言上。するに。和澤。乃文



強らうそ強く射さへ中が。中て弱くうんらひの外
きそ強うんらと。亦思や強うそ中ぶれい量か。中て弱
かんよい量か。中て且強さい論及及び中と強さといつまを
り取捨ま。満網大又歎息して云寔ふ公の弓道しゆを
用ひらるる深し。小段あるる。時より疑ひらる。師
傳を以て宏才の人よ。品ひなご。ゆり。聊ゆり先
ゆる振ふるん。試し所亦うそ。疾し。なご。射り。小段
が過言哉。免し。あらうん。事をと。り。上。ぶ。そ。ぞ。年
末の大望るれ。於秘傳の奥ら。も。あ。え。く。れ。いと。侍長とい
を。ぶ。け。られ。兵所。茶。乃。の。何。来。の。と。長。袖。の。事。る。れ。ぞ。昔。

か。び。と。御。劍。候。一。ら。と。ら。ね。は。信。經。傳。る。り。上。ら。も。
夫。ら。の。武。器。ら。と。の。と。も。其。首。長。ら。故。よ。自。ら。文。武。の
徳。を。傳。へ。ゆ。り。是。と。人。事。に。論。つ。い。も。將。軍。の。武。官。の。首
長。ら。が。ゆ。り。の。傳。和。并。学。乃。別。尚。を。兼。く。文。武。を。傳。へ。ゆ。
か。と。し。故。よ。大。將。を。ら。執。と。号。く。兼。文。備。武。れ。美。稱。と。は。
唐。乃。大。射。礼。郷。射。礼。家。朝。の。賭。弓。を。ら。皆。文。射。り。し。く。
礼。樂。と。共。よ。ゆ。り。れ。其。徳。を。觀。れ。業。を。り。可。數。為。以。
立。徳。行。者。莫。若。射。とい。へ。り。槽。を。構。へ。狭。間。を。請。ふ。
堅。甲。を。碎。き。利。兵。を。退。ら。る。武。射。り。て。干。戈。と。共。よ
ゆ。り。れ。その。乱。を。治。む。れ。氣。を。さ。り。是。ら。兵。政。所。れ。秘。事。に

新編 卷之十一

〇

次を低く。右若其の後と左なるなどは心以て一皮せ
 ざるなり。而も及奔るる。而も及左せざる。その時、初く右せん
 こそか、意あるべし。増えやそれとを弱く。其を重
 くするなどの扱ひ。理を曲ぐ。的を射よといふのうら
 是と人事の比せん。其れ性こそ、悔りて、其れ門勢を
 よする。追後賄賂とて、昇進せんとするがごとく。文武
 兼備のら道よる。是とて、唯、吐くをむる。顔
 が不き。ちるる。子。前とて、射て中ざる。似たり。盗路が
 富の痴。弓の中よ。如たり。誰う。教田と。事。盗路を。兼
 ぶ。文武周公の道を。仰。天下よ。君相。く。る。よ。知。

ぞんはる道。大成といふ。一。且。小。良。人。の。言。礼。記
 射者所以觀徳也。といふ。君子心正。一。これ。射も
 正。一。能。其。鵠。一。意。と。疑。て。云。羿。の。善。射。れ。者。る。れ。た。
 其。死。然。と。い。馬。を。射。以。徳。観。る。と。或。人。言。曰。汝。經。書
 を。讀。と。い。ま。い。ま。聖。人。の。言。徳。を。知。り。聖。人。の。一。條。の。正。路
 を。説。て。横。徑。よ。く。故。よ。公。大。の。明。う。て。私。曲。よ。ぬ。る。は
 子。張。祿。を。干。め。ん。事。と。同。よ。言。答。さ。る。く。初。悔。寡。を。射。の
 福。を。中。よ。在。と。言。人。の。り。今。福。を。求。る。者。か。の。と。く。己
 が。初。悔。を。守。り。と。中。と。て。生。涯。よ。福。を。得。ん。や。夫。ら。の。縁。を
 求。め。て。推。拳。頭。於。之。控。勢。よ。近。付。ん。よ。い。志。う。づ。小。良。が。不。才

新編 卷之一
ある君寵を辱むるもあり。況や末代治平いよつて
ふ。上下でござる。まはく下の曲直もわらわがまこと
へ。それ上の暗きうして。聖人のその時代、阿論して、
を干は事とて、まはくある。聖一人をのりて、射と、
ある。茂むとて、よある。各的、よ向く、その心、同、
論、うぬやと、は、よ、ま、りて、聖人の格言、心、
と、そ、承、り、と、や、上、り、公、大、よ、御、感、有、く、御、自、ら
御袖日記、よ、ま、る、ま、は、り、と、や、後、よ、鹿、苑、寺、の、文、庫、よ
と、写、傳、く、と、を、ん

新齋夜語卷之一終



